

毛利健三著

『自由貿易帝国主義——イギリス
産業資本の世界展開——』

東京大学出版会 1978年 x+392+2ページ

I はじめに

この書物には著者によるつぎの6篇の論文がおさめられ、全体として19世紀から20世紀初頭にかけてのイギリスの「自由貿易帝国主義」の解明が意図されている。

1. 「自由貿易帝国主義」論争の意義と限界——自由貿易物神崇拜批判の視点から——
2. イギリス自由貿易主義と「低開発」——マルクス自由貿易論の再検討——
3. イギリス産業資本の確立と後進資本主義の発展——19世紀前半の世界経済——
4. ドイツ関税同盟とイギリス資本主義——1840年代におけるドイツ鉄関税問題を中心として——
5. ブラジルにおける「コーヒー経済」の生成とイギリス産業資本の展開
6. 自由貿易と帝国——19世紀末—20世紀初頭のイギリス自由貿易帝国主義の構造——

これらのうち第4論文後半部と第6論文とは今回あらたに執筆されたもので、その他は1970年から77年にかけて発表されている。著者にはこれらのほかにもいくつかの経済史の論文があり、そのなかでも「1825年恐慌とイギリス綿工業」(『社会科学研究』17巻6号 1966年)は本書の主題と重なるところが多いものである。

以下では、これらの論文を、著者の問題関心をより抱括的な形でしめすと思われる第1、第6の両論文を中心にみてゆきたい。

II 第1論文について

ここで、著者は、「自由貿易帝国主義」の語句をポピュラーにした1953年の有名なギャラハ—ロビンソン論文を検討したあと、この問題をめぐる論争でこの2人に反論を行なった3人の「もっとも代表的な論客」の著作をも吟味して、「イギリス産業資本確立の世界史的意義を世界経済的観点から確定しようとする」(5ページ)その立場から、ギャラハ—ロビンソンの当初の問題提起を批判的に継承しようとする姿勢をうち出している(ただ

し、著者によれば、「自由貿易帝国主義」という語の創始者は1937年のR・ベアーズである。23ページ 注3)。

ギャラハとロビンソンの提起した問題は二重であった。そのひとつはイギリス経済史の諸画期に関するものであり、これは「同根ではあるが二方向へ枝葉をのびした樹木に似て」、19世紀史を通説に反してイギリスの勢力圏が膨脹をつづけた時期と規定する面と、19世紀末から20世紀はじめを同じく通説に反して本質的に19世紀史とはことなる性格のものともみることをしりぞける面ともつ。ギャラハたちが提起した第2の問題はイギリス帝国の範囲の考え方に関するもので、それまでの議論がほとんどいわゆる「公式の帝国」のみをあつかうものであったのに反し、これに「非公式の帝国」をも加えてイギリスの勢力圏を総合的にとらえようとするものであった。

このような二重の提起のうちの第2のもの——イギリス帝国のトータルな認識——は、今日では共有の財産ないし常識となっていると思われるし、著者も基本的にはこれをうけ入れている。現に、本書の第5論文は、あきらかに「非公式の帝国」の一部分であったブラジルの近代史をイギリスとの経済関係の観点から研究したものである。これにたいし、第1の、イギリス経済史、さらには帝国経済史の諸時期についてのギャラハ—ロビンソンの認識にたいしては著者は批判的にたちむかっている。すなわち、19世紀についてはギャラハたちは主としてイギリス帝国の地域的膨脹の面を重くみて、この帝国が自由貿易の旗じるしの下に「後進諸地域の政治的かつ経済的自立基盤を剝奪する」(23ページ 注4)という帝国主義的役割をすでに19世紀からはたしており、そのゆえにこそ自由貿易帝国主義とよばれるべきものであることを十分みていない。また、19世紀末ないし20世紀はじめについても、ギャラハたちが「帝国主義の諸局面」と「母国経済の経済成長の諸局面」の照応を否定し、したがってヨーロッパ帝国主義を内在的ではなく外在的に説明しようとするにたいし異論をとなえている。このような批判点からもわかるように、著者は、ギャラハたちの論旨のふくむ欠陥にもかかわらず「自由貿易帝国主義」という概念をそこからうけとり、これを積極的に用いてゆこうとしており、この態度は本書の他の諸論文からもうかがえるのである。本書は「イギリス産業資本の世界展開」と副題され、この語句は本書のほとんどの章にみられるが、それも、自由貿易の確立すなわち産業資本の世界にまたがる活動が本来の帝国主義の時代以前においても非常に帝国主義的な作用をしたとの認識によるもの

であろう。まことに本書は、それにたずさわった人びとがしばしば強烈な文明化と正義実現の使命感をいだいたところの1世紀にわたるイギリスの罪悪史の研究であると言することができるであろう。

III 第2ないし第5論文について

第2論文は、上にみたようなイギリス自由貿易主義の役割についてのマルクスの見解を検討して、その見解がとくにイギリスのアイルランド統治についての認識を軸にして1860年代に大きな変化をみせ、著者の考える自由貿易帝国主義論とほぼ同一の構造をもつにいたったことを論じている。

第3論文は19世紀の前半から中葉にかけての欧米経済史を貿易問題と関税政策の面からえがいたものである。叙述の重点は、イギリスとフランス、ドイツ、合衆国のそれぞれとの経済関係にあるが、著者によればこの三国は結局はイギリスに対抗して成功した後進資本主義国であり、それ以外の地域の多くはモノカルチュア経済をイギリスからおしつけられた植民地ないし半植民地となったのである。

つぎの第4論文は、上記第3論文中の英独関係の一部分をクローズアップしたといえるもので、1840年代前半のドイツ関税同盟とイギリスとの鉄関税交渉の内容およびその背景をみることにより、「先進イギリス資本主義が後進ドイツ資本主義の発展構造をどのように規定したか、あるいは、どのような発展の型をドイツ資本主義におしつけたか」(177ページ)をあきらかにしようとする。ここでは、関税同盟の内部においてプロシアが代表したユンカー階級の立場をイギリス自由貿易主義をささえたものとし、逆にイギリスのこの政策がユンカーの強化をもたらして「新旧両勢力の野合」(242ページ)が実現されたとの指摘がとくに注意をひく。一般に自由貿易帝国主義とはそうしたものであらうと思われる。

この論文の前半は、フリードリヒ・リストが当時の独英関係をいかに認識し、いかなる政策を提唱したかの考察にあてられている。それによればリストはイギリス商品の流入がドイツ経済を破壊するとみていたこと、そのゆえに自由貿易帝国主義論提唱の先駆者であったとみうることが指摘されている。その保護貿易主義者のリストが同時に「熱帯諸国」にたいしては自由貿易をおしつけようとしたのである(200ページ注4)。二重のあるいは重層的な自由貿易帝国主義が存在したというべきか。

第5論文はコーヒー経済からみた19世紀ブラジルの経

済史で、ここにはイギリス自由貿易主義の作用のあとを「もっとも純粹かつ典型的」(249ページ)な形でみることができる。コーヒーは他のどこにもまして合衆国に輸出され、その基礎の上にイギリスから綿製品その他の工業製品が輸入されて、ここに三角貿易が発展した。イギリス綿織物の輸出は1840年までにすでに圧倒的にヨーロッパ以外にむけられていたが、ブラジルの場合は「イギリス綿工業の世界展開こそが世界経済それじたいの形成ならびに発展の推進軸にほかならなかつたこと」(278ページ)のひとつの局面であって、既存の産業が破壊され、新興産業の発達が阻害された。さらに、多角決済を可能にしたロンドン金融市場にもふれて、産業資本のためのものであったはずの信用が商業資本の利益のために用いられたと指摘されている。

19世紀ブラジルの経済史は著者によれば今日につながる低開発の「創世記」の一部をなすものであった。

IV 第6論文について

全6章のなかではこの最終章のみが固有の19世紀ではなく古典的帝国主義の時代を、すなわちギャラハたちがその見直しを提唱している2番目の時期を対象として分析を行なっている。もっとも、このような量的な比率はかならずしも著者の関心を正確に示すものではないであろう。本書のところで、現代の状況への著者のつよい関心をみることができるからである。

さて、著者はまず、この時期にあってもなぜ自由貿易主義がくずれていないのか、との質問を出し、3人の学者による解答を紹介する。その第1は、自由貿易が多角的決済の運営に不可欠であったとし、第2は、自由貿易それ自体が弱体化しつつあるイギリス経済にとっての退路であったとし、第3は、保護主義ではなく自由貿易主義こそがイギリス帝国主義の特質であったとするものである。この第3の説が自由貿易帝国主義論にもっとも近いと思われるが、著者は他の2説をも批判的に撰取しようとしている。

この時期のあいだにイギリスの輸出市場におけるアジア、その他の後進諸地域の比重は半分をこえるようになる。また、イギリスの国際収支は1870年代後半から海外投資収益なしには成りたたなくなるのであり、その前後から鉄道をはじめとする海外投資が急増した。一般に一次産品への世界的需要が急増するのにもなってイギリス植民地からの輸出におけるイギリスの比重は後退したが、同時にインド(1880年代以降のイギリスの最大の輸

出市場)をキイとし植民地をも含む世界的な多角貿易と決済の構造が形成され、植民地のいわゆる低開発が進行する。著者はこのような背景のもとでは帝国特惠関税は実情にそわぬものであったとし、その実施を要求したチェンバレンの運動にたいするロンドンのシティ側の反論の分析をもって本章を終わっている。

V 若干の問題

これまで紹介したように、本書は、1815年のナポレオン戦争終結から1914年の大戦開始までの100年のあいだにイギリスの自由貿易帝国主義が世界をいかに加工したかを全体的にえがき出すことにしつようにせまった研究書である。管見ではこの意図は見事に成功している。この書評は、本書から多くを学ぶところのあった現代研究者の読書ノートの域を出ないが、最後に気付いた若干の問題点を述べてむすびとしたい。

1. 著者は今日の「低開発」(この語はA・G・フランクからとられている。フランクの説は著者のそれと符号するところが多いと思われる。246ページ 注1)の「創世記」(vi, 292ページ)を19世紀なかばに求めているようにみえる(第3, 第5論文)。これは、さきに紹介したところにてらせば、もとより十分説得力をもつではあるが、それを指摘するだけでは19世紀末以来の時代の意義が明らかにはならない。この後者の点についても、著者はもちろん第6論文でふれているのであるが、この「第三世界の史的起源の解明」(iii)において19世紀なかばと19世紀末ないし20世紀はじめとにそれぞれの程度の重要性をおいているのであろうか。

2. これと関連するが、本書では自由貿易帝国主義の語句が19世紀中葉についても用いられ、19世紀末からのあたらしい時期にたいしても使われており、著者もこのような用法を積極的に主張されるが(300ページ 注3)、それらを「第一類型」、「第二類型」(vii)とよぶ以上には二つの自由貿易帝国主義の差異が概念的にあたえられているといえないのではあるまいか。

3. 本書は上述したように第一次大戦までの1世紀間に関するもので、とくに第6論文で古典的帝国主義の時期をあつかっている。いま、この第6論文をもとにして、イギリスあるいはその帝国の側からの第一次大戦の必然性をさぐるとすると、それは輸出市場、投資市場、原料・食料市場の確保ということになるのであろうか。第1論文でいくつかの帝国主義論を検討されているのだから、できればイギリスの側からみた戦争の性格と必然性につ

いての著者の視点の提示が——多角的決済というひとつの均衡がやぶれる論理の提示とともに——のぞましかったと考える。

4. 毛利氏が本書を通じてたびたび言及しそこから示唆をうけることが多かったとしている大塚久雄氏の所説についてである。たしかに、大塚氏の「不均等発展の同時存在」(『産業革命の諸類型』[『大塚久雄著作集』5巻 岩波書店 1969年] 446ページ、「金融史における国際比較の視点」[同上書 9巻 1969年] 355ページなど)の理論が毛利氏による自由貿易帝国主義の研究に大きな影響をあたえたことは容易に想像できる。周知のように大塚氏は「封建制から資本主義への移行」を研究テーマとしながらも、最近の南北問題の登場にてらして従来の社会科学の問題意識や研究視角を検討されようとしている(たとえば「予見のための世界史」[同上書 9巻] 199~200ページ)。そのことにたいし大きな敬意をはらわずにはいられない。ただ、大塚氏が低開発諸国では産業化が近代化をもたらさないとし、これら諸国における進歩の阻害条件を明らかにすべく比較のためむしろドイツ、ロシア、日本などの後進資本主義諸国の研究にむかわれようとする時(前出「産業革命の諸類型」467ページ)、それはおそらく比較経済史学の枠を守りながら発言されたことではあろうけれども、低開発諸国の停滞を固定的にみているのではないかの疑問をいだかざるをえない。毛利氏の書物により即していうとすれば、自由貿易帝国主義およびこれとむすびついた各地域の諸勢力にたいする抵抗とその成果についてはすでに若干のすぐれた研究もみられるのであって、これらの抵抗をも合わせて視野におさめることによって「不均等発展の同時存在」がその全体において明らかになるのではないであろうか。

小稿を終わるにあたり、このような労作を発表された著者にたいしあらためて敬意を表するとともに、イギリス帝国史の今日的帰結の研究において力を合わせうる機会のあることをのぞんで筆をおきたいと思う。

(アジア経済研究所調査研究部)
主任調査研究員 山口博一